

箸

伊藤左千夫

青空文庫

朝霧あさぎりがうすらいでくる。庭えんじゆの槐えんじゆからかすかに日光にかりくがもれる。主人しゆじんは巻まきたばこをく
 ゆらしながら、障子しょうじをあけ放はなして庭えんじゆをながめている。槐えんじゆの下の大きな水鉢みずばちには、すい
 れんが水すいめん面にすきまもないくらい、丸まるい葉はを浮うけて花はなが一輪りんざ咲さいてる。うす紅くれないというよ
 りは、そのうす紅くれな色が、いっそう細こまかに溶よう解かいして、ただうすら赤あかいにおいといたよう
 な淡あわあわしい花はなである。主人しゆじんは、花はなに見みとれてうつつなくながめいつている。

庭きどの木戸きどをおして細さいくん君くんが顔かほをだした。細さいくん君くんは年とし三十五、六、色あざぐろの浅あざぐろ黒くろい、顔かほがまえ
 のしつかりとした、氣きむつかしそうな人ひとである。

「ねいあなた、大島おおしまの若わか衆しゆうが乳ちちしぼりをつれてきてくれましたがね」

こういつて、細さいくん君くんは庭にわにはいつてくる。主人しゆじんはゆるやかに細さいくん君くんに目めをくれたが、た
 ちまちけわしい声こゑでどなつた。

「そんなひよりげたで庭にわへはいっちやいかん、雨あめあがりの庭にわをふみくずしてしまふじやな
 いか。どうも無ぶ作法さほうなやつじやなあ、こら、いかんというに……」

主人のどなりと細君の足とはほとんど並行したので、主人は舌うちして細君をながめたが、細君は、主人の小言に顔の色も動かさず、あえてまたいいわけもいわない。ただにわかには足をうかすようなあるきかたをして縁先へきてしまった。

げたのあとは、ずいぶん目だつて庭に傷つけたけれど、主人はふたたび小言はいわなかった。主人は、平生自分の神経過敏から、らちもないことに腹をたてることを、自分の損だと考へてゐる人である。いま細君にたいする小言のしりを結ばずにしまったことを、ふとおのれに勝ちえたように思いついて、すいれんのこととも忘れ、庭を損じたことも忘れて、笑顔えがおを細君にむけた。

細君は下女げじよをよんで、自分のひよりげたを駒こまげたにとりかえさして、縁端えんばたへ腰こしをかけた。そうしてげたのあとを消けしてくれ、と下女に命めいじた。

細君は、主人からある場合ばあいになにほどどなられても、たいていのことでは腹はらをたてたり、反抗はんかうしたりせぬ。それはあながち主人しゅじんの小言こごとになれたからというのでもなく、主人を恐おそれないからというのでもない。細君は主人の小言を根ねのある小言か根のない小言かを、よく直覚ちよつかくてき的に判断はんだんして、根のない小言と思つたときは、なんといわれたつてけつして主人にさからうようなことはせぬ。

主人は細君をそれほど重んじてはいないが、ただ以上の点をおおいに敬している。

「おまえは、とくな性だ」

とほめてる。細君も笑つて、

「とくな性ではありませんよ、はじめから損をあきらめてるから、とくのように見えるのでしよう」という。

世間には、ちよつとしたはずみで夫から打たれても、それをいつこう心にもとめず、打たれたあとからすぐ夫と仲よく話をする女がいくらかもあるから、これは女性の特有性かもしれない。妻などはそれをすこしうまく発達したものであると、主人は考えている。

そう考えてみると、自分が妻にたいしてわずかのことに大声たててどなるのは、いささかきまりがわるくなる。それで近來主人は、ある場合にどなることはどなつても、きょうのようにしりを結ばぬことがおおいのだ。

乳しぼりというのは、五十ばかりの赤ら顔な、がんじょうな、人に会つてもただ頭をたてにすこし動かすだけで、めつたに口をきかない。それでどうかすると大きな茶目を見はつて人を見る。たいていの女であつたら、気味わるがつて顔をそむけそうな、すこぶる人好きのわるい男だ。

つれてきた若衆の話によると、乳しぼりは非常にじょうずで朝おきるにも、とけいさえまかしておけば、一年にも二年にも一朝時間をたがえるようなことはない。ただすこし頭の調子が人なみでないから、どうもこれまで一か所に長くいられなかつたが、ご主人のほうで、すこしその氣質をのみこんでいて使つてくだされば、それはそれはりっぱな乳しぼりだ、こちらのだんなならきつとうまく使つてくださるにちがいない、本人もそういつてあがつたというのであつた。

細君は、こうひととおり話しおわつてから、

「わたしはどうも、あまり好ましくないけれど、乳しぼりもなくてはじつにこまるから、おいてみましようねえ」

とつけくわえた。主人も聞いてみると、すこしはうわさに聞いたことのある、花前という男だ。変人で手におえないとも、じつはかわいそうな人間だともいわれて、府下の牛乳屋をわたっていた乳しぼりである。主人はしばらく考えたのち、

「それはうわさに聞いたことのある変人の乳しぼりだ。朝おきるのがたしかで乳しぼりがじょうずなら、使つてみようじゃねいか。うまくいかぬことがあつたら、それはそのときのこととして、とにかくおいてみるさ」

細君も不安なりに同意して、その乳しぼりをおいてやることになった。牛舎のほうでは親牛と子牛とを引き分けて運動場にだしたから、親牛も子牛もともによびあつて鳴いてる。二、三日ぶり外へだされた乳牛は、よろこんでしきりに運動場をどびまわる。

洗濯物に気をとられてる細君の目には、雨あがりのうるおった庭のおもむきも、すいれんのうるわしい花もいつこう問題にはならない。

「それじゃそう」

との一言をのこして、また木戸から細君はでていった。

二

昼乳をしぼる刻限になつた。女が若衆をおこす。細君は花前にひととおりのさしずをしてくださいというてきた。ほかのふたりの若いものは運動場の乳牛を入れにかかると、はり板をふみたてる牛の足音がバタバタ混合して聞こえる。主人も牛舎へでた。乳牛はそれぞれ馬塞にはいつて、ひとりは掃除にかかる、ひとりは飼葉に

かかる。主人はここではじめて花前に会った。

五十になつてもしりのおちつかない、落ちぶれはてた花前は、さだめてそぼろなふうをしてるかと思いのほか、髪をみじかく刈り、ひげをきれいにそつて、ズボンにチョッキもややあかぬけのしたのを着てゐる。白いシャツをひじまでまくり、天竺もめんのまつ白い前掛けして、かいがいしい身ごしらえだ。

主人はまずそれがおおいに気持ちよかつた。花前は主人に対しても、ただ例のごとくちよつと頭をさげたばかりである。かえつて主人のほうからしたしくことばをかけた。

「花前、おまえのうわさはちよいちよい聞いていたよ、こんどよくきてくれた、なにぶん頼むぞ」

花前は、はいともいわない、わずかに目であいさつしてゐる。主人は家の習慣とだいたいの順序とをつけて、これだけの仕事はおまえにまかせるからと命じた。

花前は、耳で合点したともいふべきふうをして仕事にかかる。片手にしぼりバケツと腰掛けとを持ち、片手に乳房を洗うべき湯をくんで、じきにしぼりにかかる。花前もこ

「どれとどれをしぼるのですか」

と主人に聞いた。

主人はこれとこれと、つぎつぎ数かずえてつごう十余頭よとうが乳ちちのであるのだ。それからこの西に側しがわから三つめの黒白まだらが足をあげるから、飼かい葉ばをやっておいて、しぼらねばいかぬとつげる。花前はそういう下から、すぐはじめの赤牛からしぼりにかかった。花前の乳しぼる姿勢しせいははなはだ氣きにいった。

左の足を乳にゆうぎゆう牛むねの胸あたりまでさし入れ、かぎの手に折おつた右足のひぎにバケツを持たせて、肩かたを乳にゆうぎゆう牛むねのわき腹ばらにつけ、手も動かすからだも動かす、乳にゆうじゆう汁たぎは滝たぎのようにバケツにほとぼしる。五分間ばかりで四升しやうあまりの乳をしぼった。しぼった乳ちちは、高たかくもりあがつたあわが雪のように白く、毛のさきほどのほこりもない。主人はおぼえずみごとな腕うでまえ前まへだと嘆たん称しょうした。

乳を受け取とつて濾こしにかけた細君こじんも、きれの上うへにほこりがないのおどろいて、「なるほど、花前はしぼるのがじょうずだ」と主人のところへ顔をだしてほめる。

花前は色いろも動きはしない。もとより一言ごんものをいうのでない。主人しゆじんや細君さいくんとはなんらの交こう渉しやうもないふうで、つぎの黒白まだらの牛にかかった。主人は兼吉かねきちをよんで、

いましぼるからこの牛に飼葉をやれと命じた。花前はしぼりバケツを左に持ちながら、右手で乳牛の肩のへんをなでて、バアバアとやさしく二、三度声をかける。

乳牛はすこしがたがた四肢を動かしたが、飼葉をえて一心に食いはじめた。花前は、いささか戒心の態度をとってしぼりはじめた。じゆうぶん心得ている花前は、なんの苦もなくはね牛の乳をしぼってしまった。主人は安心すると同時に、つくづく花前の容貌風采を注視して、一種の感じを禁じえなかつた。

その毅然として、なにかかたく信ずるところあるがごとき花前は、その技においてもじつに神に達している。しかるにもかかわらず、人に使われているのみならず、おちついて使われている主人をすらえられないかと思うと、そこに大なる矛盾を思わぬわけにいかない。

見るところ、花前は、ほとんど口をきく必要のないまで、自分の思うとおりを直行するほか、なんの考えるところもないらしい。こう思うと、われわれの平生は、ただ方便を主とすることばかりおおくて、かえつてこの花前に気恥ずかしいような感じもする。

花前はかえつて人のいつわりおおきにあきれて、ほとんど世人を眼中におかなく、

心しんちゆう 中ちゆうに自分らをまで侮蔑ぶべつしつくしてゐるのじゃないかとも思われる。さりとてまた、五十になる身みを人にたくして、とんと人と交こう渉しやうしえない、世にもあわれな人間とも思われる。

主人が妄想もうそうに落ちて、いたずらに立てるあいだに、花前は二頭とう三頭とちやくちやくしほり進む。かれは毅然きぜんたる態度たいどでそのなすべきことをなしつつある。花前は一面めんあわれむべき人間には相違そつゐないが、主人も花前を見るにつけ、みずからかえりみると、確信かくしんなきわが生活の、精神せいしん上じやうにその日暮ひぐらしである恥はずかしさをうち消すことができなかつた。「だんな、くそがはねますよ、すこしどうかこつちへきてください」

そういう兼吉かねきちは、もはや飼かい葉はをすませて、おぼれ板いたの掃除そうじにかかつたのだ。うまやぼうきに力を入れ、糞尿ふんによう相混あいこんじた汚物おぶつを下へ下へとはきおろしてきたのである。

「湯ゆが煮にたつたから、ふすまをかいておくれ、兼吉かねきち」

流ながし場ばから細君こほろの声で兼吉はほうきをおいて走つていく。五郎はまぐさをいつせいに乳牛にゅうにふりまく。十七、八頭の乳牛は一時じに騷然そうぜんとして草をあらそいはむ。そのあいだにも花前はすこしでも、わが行為こうゐの緊張きんちやうをゆるめない。やがて主人は奥おくに客きやくがあるというので牛舎ぎゆうしやをでた。

三

その夜の晩餐ばんさんのときに、細君はそろそろこぼしはじめた。

「ねいあなた、人なみでないっち話ではあつたけれど、よほど人なみでないようですねい、主人からものをいわれても、なるべくは返事へんじもしたくないというふうですからねえ、あれでどうでしょうかねえ」

「うむ、変人へんじんだと承知しょうちでおいでみるのだから、いまからこぼすのはまだ早い、とにかく十日かか二十日も使つてみることにわたりやせんじやないか」

「そりやそうですけれど」

「えいさ、変人へんじんのなりがわかりさえすりや、その変人なりに使つてやる道があるだろう」
話もそれでおわりになったが、主人しゅじんはこの花前はなまえのことについて考えることに興味きょうみを持つてきた。その夜もいろいろと考えた。

かれははじめから変人ではなかつたろう。かれがあんなになるについては、かならず容易ういならぬ経歴けいれきがあつたにちがいない。それがわかれば、いつそうかれが今日こんにちの状じょうた容よ

態いに興味きようみがふかいだろうけれど、わからぬものはしかたがないとして、きよう見ただけでもかれは興味きようみある変人だ。かれが顔色とかれが風采ふうさいとに見るもかれがはじめから狂愚きやうぐでないことはわかる。

かれが行動こうどうの確信かくしんあるがごとくにして、その確信かくしんの底そこがぬけているところ、かれが変人たるゆえんではあるが、しかしながらかれは確信かくしんという自覚じかくがあるかどうか、確信かくしんの自覚じかくがないのに底ぬけを気づくべきはずのないのはあたりまえだ。おそらくかれには確信かくしんという意識いしきはないにちがいない。確信かくしんも意識いしきもないにしても、かれの实际行动じつこうどうは緊張きんちやうした精神しんげんをもって毅然きぜん直行ちやうこうしている。その脈絡みやくらくのていどや統一とういつの範囲はんいは、もうすこしたつてみねばわからぬが、とにかく一部の脈絡みやくらくと統一とういつとはじゆうぶんみとめることができる。みような変人があつたものだ。

なにひとつ人にすぐれたことのない人間にんげんから見ると、ああいう人間のほうがたしかにおもしろい。あまりよく他たと調和ちやうわする人間にんげんにろくなやつはないけれど、そのろくでもないやつのほうが、この世の中ではたいにい幸福こうふくであるのがおかしい。

自分おのれと花前はなまえとをくらべて考えるとおもしろい対照たいしやうができる。われわれは問題もんだいの大小だいせうを識別しきべつして、いつでも小問題せうもんだいをごまかしているが、花前はなまえは問題もんだいの大小だいせうなどという考えが

はじめからなくて、なにごとまかすことが絶対ぜつたいにできない。であるからわれわれは、近い左右前後さゆうぜんごはいつでもあいまいであるけれど、遠い前後ひろと広い周囲しゅういには、やや脈みやくら絡くと統一とういつがある。花前になると、それが反対はんたいになって、近い左右前後さゆうぜんごはいつでも明瞭めいりょうであつて、遠い前後や広い周囲しゅういはまるで暗くらやみである。

まずちよつとこんなふうさべつに差別されるようだが、近い周囲をあいまいにして世よに処しよするといふことが、けつしてほころべきことではなからう。結局けつぎよく主人は、花前に学まなぶところがおおいなと考かんえた。

そのよく朝であつた。細君さいくんはたばこ盆ぼんに長いきせるを持ちそえて、主人の居間いまにはいつてきた。

「花前は保証人ほしょうにんがあるでしようか、なんでも大島おおじまの若衆わかしゆうの話では、親類しんるいも身内みうちもないひとりものだということですから、保証人はないかもしれせんよ」

「うむ」

「金銭きんせんに關係かんけいしないから、そのほうはなんですけれど、病氣にでもかかつたらこまりやしませんかねえ」

「そうさな、保証人ほしょうにんのあるにましたことはないが……じゃちよつと花前はなまえをよんでみる」

細君さいくんは下女げじよに命めいじて花前はなまへをよばせる。まもなくかれはズボンチョッキのこぎつぱりしたふうで唐紙からかみの外そとへすわった。例れいのごとく軽く黙もく礼れいしただけで、もとよりものをいわずよそ見よそみをしている。花前はなまへの顔色かおいろには不安ふあんもなければ安心あんしんもない。主人しゅじんは無意職むいしきに色をやわらげてことば軽く、

「花前、おまえ保証人ほしょうにんはあるかね」

「ありません」

花前はなまへは、よどみなく決然けつぜんと答こたえて平気へいきでいる。話わのしりを結むすばないことになれてる主人しゅじんも、ただありませんと聞いたばかりではこまった。なみのものであれば、すぐにそれでおまえどうする気きかと問といかえすにきまつてるけれど、変人へんじんをみとめている花前はなまへにそういつてもしかたがないから、

「うん、そうか」

といったまま、しばらく黙もくしている。細君さいくんはじれ気味きみに、

「おまえずいぶん長いあいだ東京とうきょうにいるというに、懇意こんいの人もないのかね」

花前はなまへはちよつと目を細君さいくんにむけたが、くちびるは動うごかない。これは細君さいくんの問といがかしなのだ。変人へんじんでとおつた人間にんげんに懇意こんいな人があるかでもあるまい。主人しゅじんはしかたがなく、

「まあいいや、そんなことあとの話にしよう、えいや花前」

「保証人がなくていけないければ帰ります」

「いや、帰られてはこまる、えいから花前やってくれや、じゃこうしよう、おれが保証人になることにしよう、だからやってくれや」

細君は、目をぱちつかせて主人の顔を見る。

主人は目で細君を制す。勝手に子どもが泣きたったので細君は去った。花前もつづいて立ちかけたのをふたたび座になおって、

「この国で生まれた人間ですから、つまりはこの国のやつかいになってもしかたありません」

主人はきつと花前を見おろした。果然、花前にはなにか信念があるなど思った。それ

でさらにおだやかに、

「そうだとも、それでおまえの精神はわかった、それで、おれがおまえの保証人になるから、おまえ安心してやってくれ、まだ昼乳までにはすこし休むまがあるから休んでくれ」

こういわれて花前は、それに答うることばなく立った。花前は保証人になる人がないの

ではないらしい。自分のようなものは、いよいよ働けなくなれば、個人が世話するよりは国家が世話すべきだと思ってるらしい。それならば考えのすじはたつてしていると主人は思った。主人はうしろ姿を見送つて、この変人いよいよおもしろいなと思つた。

四

それから五、六日たつた。花前の働きぶりはほとんど水車の回転とちがわない。時間かんの順序じゆんじよといい、仕事しごとの進行しんこうといい、いかにも機械きかいてき的である。余分よぶんなことはすこしもしないかわりに、なすべきことはちよつとのゆるみもない。細君はやや安心して、結局けつぐ よい乳しぼりだと思つた。

ところが花前はなまえの評判ひようばんは、若衆わかしゆうのほうからも台所だいどころのほうからもさかんにおこつた。花前は、いままでに一度もふたりの朋輩ほうばいと口をきかない。自分ぶんは一分もちがわず時間どおりにおきるが、けつして朋輩ほうばいをおこさない。それでいまだに一度も笑つたこともない。したがって人がどんなことしようか、それにいつこう頓着とんちやくもせぬ。自分ぶんは自分だけのことをして、さつさとあがつてしまふ。

そうかといつて、花前さんちよつとこれこれしてくれといえ、それにさからいもしない。自分のからだにだけは非常に潔癖であつて、シャツとか前掛けとかいうものは毎日洗つてゐる。

主人は笑つて、それだけのことならばしごくけつこうじやないかという。

台所のうわさはまたおもしろい。下女はだいいちに花前さんはえい人だという。変人だといつてばかりするのはかわいそうだという。ご飯だといわなければ、けつして食ひにこない。

一日二日まえ、下女がうっかりしてよぶのを忘れたら、ついに飯を食ひにこなかつた。若衆はすましたことと思つてきそわなかつたとか。下女が夜おそくふと気づいて、聞きにいつたら、まだ食わなかつたそうで、それから食ひにきた。

下女はとんだことをしたと悔やんでいた。花前が食事も水車的でいつもおなじような順序をとる。自分のときめた飯碗と汁碗とは、かならず番ごと自分で洗つて飯を食べる。白いふきんと象牙のはしとをだいに持つておつて、それは人につけさせない。この象牙のはしにはだれもおどろいてる。ややたいらめな質のもつとも優等な象牙で、金蒔絵がしてある。細君などは見たこともないものだといつてゐる。下女の話

によると、下女が花前さんのおはしはじつにりっぱなものですねえ、なにかいわくのありそうなはしじやありませんかというのと、しろりと笑うそうだ。

下女は花前さんを笑わせるにや、はしをほめるにかぎるといつて笑っている。

しかし細君や子どもたちは、変人とはいえ、花前がいかにもきちんとした顔をしているので、いたずら半分にはしのことを問うてみるようなことは得しない。細君はどういうものか、いまだに花前を気味わるくばかり思つて、かわいそうという心持ちになれぬらしい。

主人は以上の話を総合してみても、残酷な悲惨な印象を自分の脳裏に禁じえない。精神病者に相違ないけれど、花前が人間ちゆうの废物でないことは、畜牛うしいつさいのことを弁じて、ほとんどさしつかえなきのみならず、ある点には、なみの人のおよばぬことをしている。いつかのように、この国で生まれた人間ですからというよな調子に、人世上のことになんらか考えてやしまいか。人世問題になんらかの考えがあつて、いまの境遇にありとせば、いよいよ悲惨な運命である。

こう考える主人は、ときどきそれとなく奥へ招いで茶菓などをあたえ、種々会話をこころみるけれど、かれが心面になんらのひびきを見いだしえない。なにを問うても、か

れは、はあとというきりで、なんらの語もつづらない。主人は百方意をつくして、この国で生まれた人間ですからというような糸口を引きだそうとこころみたが、いつでも失敗におわった。かれは主人に対したときにも、ときをきらわず立ってしまふ。

あるときはその象牙のはしから話しかけてみると、なるほど下女のいうごとく、かれがなんじょうな顔にしろりと笑いを動かした。しかしこれも笑うたきりで、それ以上には、なんの話もせぬ。依然たる前後の暗黒であつた。

そのように花前は、絶対にほかに交渉しえないけれど、周囲はしだいにその変人をのみこみ、変人になれて、石塊を綿につつんだごとく、無交渉なりに交渉ができてゐる。かくて数月をぶじにすごした。

五

人との交渉には、感情絶無な花前も、ふしぎと牛はだいじにする。愛してだいじにするのか、運動の習慣でだいじにするのか、いささか分明を欠くのだが、とにかく牛をだいじにすることはひととおりでない。それに規則的にしかも仕事は熟練して

るから、花前はなまえがきてから二か月にして、牛舎ぎゅうしゃは一変へんした観かんがある、主人しゅじんはもはやじゆうぶんに花前はなまえの変人へんじんなりをのみこんでるから、すべてつごうよくはこぶのであった。水車すいしゃの運動うんどうはことなき平生へいぜいには、きわめて円滑えんかつにゆくけれど、なにかすこしでも輪わの回転かいてんにふれるものがあると、いささかの故障こしょうが全部ぜんぶの働はたらきをやぶるのである。

主人しゅじんは読書どくしょにあいて庭にわに運動うんどうした。秋草あきくさもまったく朽くちつくして、わずかにけいとうと野菊のぎくの花はながのこつてゐるばかりである。主人しゅじんは熱ねつした頭あたまを冷氣れいきにさらしてしばらくたらずんでおつた。露霜つゆしもに痛いためられて、さびにさびたのこりの草花くさばなに、いいがたきあわれを感じかんじて、主人しゅじんはなんとなし悲かなしくなつた。

こういうときには、みようにものに驚おどろきやすい、主人しゅじんは耳みみをそばだてて、牛舎ぎゅうしゃに荒あらしきののしりの声こゑを聞きつけた。やがて細君さいくんも木戸きどへ顔をだして、きてくれという。いつてみると、兼吉かねきちと五郎ごろうがふたりして、花前はなまえを引きたてて牛舎ぎゅうしゃからでるところであつた。

花前はなまえは、ややもすればふたりをはらいのけようとする。ふたりは、ひつしと花前はなまえの両手りょうてを片手かたてずつとらえて離はなさない。ふたりはどうとう花前はなまえを主人しゅじんのまえに引きすえて訴うてる。兼吉かねきちは、

「わし、この氣ちがいうに打たれました、なぐり返かえそうと思つても、ひとりではとてもこの野郎やろうにかないません、五郎ごろうさんがおさえてくれなきや……わし、こんな氣ちがいといつしよによにいるのはいやですから、ひまをいただきます」

「この若いわかものが、牛をたたいたから打ちました」

「わし、牛を打つたではありません……」

主人しゅじんは、まあまあとことばしづかにふたりを制せいした。秋のゆくというさびしいこのご

ろ、無む分別ぶんべつな若ものと氣ちがいとのあらそいである。主人はおぼえず身みぶるいをした。

花前はなまえは平然へいぜんたるもので、

「牛をたたくという法ほうはない」

こう語勢ごせい強いくいつたきり、ふたたび口を開ひらかぬ。ふたりはしきりに氣ちがいなどに打たれたりなんかされて、とてもいられないとわめく。

話をまとめみると、兼吉かねきちが尿板にようばんのうしろを通とおろうとすると、一頭とうの牛がうしろへさがつて立つてるので通れないから、ただ平手ひらてで軽かるく牛のしりを打つたまでなのを、牛をだいにする花前は、兼吉がらんぼうに牛をたたいたとおこつたらしい。それで例れいの無む言ごんで、不意ふいにうしろから兼吉にげんこをくれた。

兼吉は、腕力わんりよくでは花前によりつけないから、五郎に加勢かせいを頼たのんだのだ。事実は兼吉が牛をたいたのかもしれないが、ふたりのいい状じようはそうであつた。ふたりに同時どうじに去さられてもこまるから、主人はふたりを庭にわへつれこんだ。

「そうだ……：気がいだから、おれに免めんじておまえたちもがまんしてくれ、おれがあやまり賃ちんはだすから、花前も気がいながら、牛をだいにしてからの思いちがいであつてみるとかわいそうなところがある、だからおれがあやまる、これからおまえたちはふたりで仲間なかまになつていて、花前はなまえは相手あいてにせぬようにしていたらえいじやないか、これで一ぱいやつてがまんしてくれるさ、えいか」

兼吉けんきちも五郎ごろうも主人に、おれがあやまるからといわれては口はあけない。酒代さかだい一枚まいでかれらはむぞうさにきげんを直なおした。水車の回かいてん転とも止めずにすんだ。生業せいぎようということにかかわつていれば、らちもないことにも怖おじ驚おどろくばかばかしさを主人はふかく感じた。細君さいくんもでてきて、

「わたしほんとおどろきました、あのけたたましい声つたらないですもの、気がいがどんなことをしたかと思つて……：ああそうでしたか、まあよかつた、それにしても花前はなんだかわたし、気味きみがわるくて……」

主人は細君のことばを打ち消して、

「花前の気ちがいぶりもわかっているのだから、すこしも気味のわるいことはないよ、こんどのはどつちがどうだかわかりやしない、乳しぼりが牛をだいにじにするというのだから、たとえまちがっても憎くはないじやないか」

細君は、

「そりやそうですがねい」

とまだふにおちかねたが、主人は、

「あんなにいかいかしいふうをしておつても、しりのぬけてるのが、かわいそうに見えるな
いか、ふびんをかけてやれ」

というのであつた。細君の去つたあとで、主人は、おもしろいということのない花前がおこつたというのはおかしいなど考えたけれど、その理由は解釈がつかなくつた。

はじめて花前に笑させた下女は、おせっかいにも花前にせび象牙のはしの話をさせるといつて、いろいろしんせつに世話をしたり、話をしかけたりしたけれど、しろりと笑わせるのが精一ぱいで、それ以上にはなにごとをもえられなかつた。もう根がつきたと下女は笑つてゐる。

かくて水車はますますぶじに回転していくうち、意外な滑稽劇が一家を笑わせ、石塊のごとき花前も漸次にこの家になずんでくる。

ある日、主人のるすの日であった。警視庁の技師が、ふいに牛舎の検分に来た。いきなり牛舎のまえに車にのりこんできて、すこぶる権柄に主人はいるかどとなつた。兼吉と五郎は洗いものをしてる。花前が例の毅然たる態度で技師先生のまえにでた。技師はむろん主人と見たので、いささかていねいに用むきを談ずる。

花前はときどき頭を動かすだけで一言もものをいわない。技師先生 心中非常に激高、なお二言三言、いっそう権柄に命令したけれど、花前のことだから冷然として相手にならない。技師は激しているから花前の花前たるところにいつこう気がつかない。技師はたまりかねたか、ここでは話ができないといって玄関へまわつた。あらたまつてその無礼を詰責するつもりであつたらしい。

玄関では細君がでて、ねんごろに主人の不在なことをいうて、たばこ盆などをだした。技師もここで花前の花前たることを聞き、おおいにきまりわるくなつて、むつかしい顔のしまつに究したまま逃げ去つた。夜、主人が帰つてから一家くずるるばかり大笑いをやつた。兼吉と五郎は、かわりがわり技師と花前との身ぶりをやつて人を笑わせた。細君が

花前を気味わるがるのも、まったくそのころから消えた。

六

年が暮れて春がき、夏がきてまた秋がきた。花前もここに早一年おつてしまった。この間、花前の一身上には、なんらの変化もみとめえなかつた。ただ考え性な主人の頭には、花前のように、きのうときようとの連絡もなく、もちろんきようどあすとの連絡もない。まして一年とかひと月とかいう時間の意味のありようもなく、かれは生きるために働くのでなく、生きているから働くというような生活、きようというほかに時間の考えはなく、自分というほかに人生の考えはない。いやきようということも自分ということも意識していやしない。

してみると、かれに義務責任などという考えのありようもなければ、きゆうくつも心配も不安もないわけだ。明るいと魔の住まないごとく、花前のような生活には虚偽罪悪などというものの宿りようがない。大悟徹底というのがそれか。絶対的安心というものがそれか。むかしは、宰相を辞して人のために園にそそいだという話があるが、

花前はそれに比すべき感がある。

主人はまたこう考えた。かえりみて自分の生活をみると、じつになさけないとらわれの身である。わずかに手を動かすにも足を動かすにも、あとさきを考えねばならぬ。かりそめにものをいうにも、人の顔色を見ねばならぬ。前後左右に係累者はまといついている。なにをひとつするにも、自分のみを標準として動くことはできぬ。とうてい社会組織上の一分子であるから、いかなる場合にも絶対単独の行動はゆるされぬ。

それでつまりよいかげんなことばかりをやつて、まにあわせのことばかりいつておらねばならぬ。それというのも、義務とか責任とかいうことを、まじめに正直に考えておつたらば、實際人間の立つ瀬はない。手足を縛して水中におかれたとんなんの変わるところもない。

このせつない羈絆を脱して、すこしでもかつてなことをやるとなつたらば、人間の仲間入りもできない罪悪者とならねばならぬ。考えれば考えるほどばかげているけれども、それをどうすることもできないのがわれわれの生活状態である。

こう思うと自分がどれだけ花前に勝っているか、いよいよわからなくなる。むしろどうか一度でもよいから花前のような生活がしてみたくなってくる。

要するに、自分を強く意識するのがわるいのだ。自分を強く意識するから、世の中がきゆうくつになる。主人はこんな結論をこしらえてみたけれど、すぐあとからあやふやになってしまった。自分と花前との差別はどう考えても、意識があるのとないのとのほかない。自分に意識がなければ自分はこのままでもすぐ花前になることができるとすれば、花前はけつしてうらやむべきでないのだ。

大悟徹底と花前とは有と無との差である。花前は大悟徹底の形であつて心ではなかつた。主人はようやく結論をえたのであつた。主人はこの結論をえたにかかわらず、さらば自分の生活にどれだけの価値があるかと思つてみて、やはりわけがわからなくなつた。花前と大悟徹底とは、裏表であるが、自分と大悟徹底とは千葉と東京との差であるように思われた。

ここ一、二年水害をまぬがれた庭は、去年より秋草がさかんである。花のさかりには、まだしばらくまががありそうだ。主人はけさも朝涼に庭を散歩する。すいれんの花を見て、去年花前がきたのも秋であつたことを思いだす。この日、主人は細君より花前の上について意外な消息を聞いた。

花前は、けさ民子をだいてしばらくあるいておつた。細君はもちろん、若衆をはじ

め下女^{げじよ}までいつせいにふしぎがったとの話である。それは實際^{じつさい}ふしぎに相違^{そうゐ}ない。これまでの花前^{はなまへ}にして、子どもをだいてみるなぞは、どうしても破天荒^{はてんこう}なできごとといわねばならぬ。

下女の話によると、タアちゃんはこれまでもときどき、花前、花前といつて花前のところへいき、花前もタアちゃんの持つていったお菓子^{かし}を食^たべたようすであつたという。主人はこの話を非常^{ひじょう}な興味^{きょうみ}をもつて聞いた。今後^{こんご}花前^{はなまへ}の上になんらかの變化^{へんか}をきたすこともやと思われないわけにはいかなかつた。

その後^ご自分^{じぶん}も注意^{ちゅうい}し家のもの話にも注意してみると、花前^{はなまへ}はかならず一度ぐらいつ民子^{たみこ}をだいてみる。民子^{たみこ}もますます花前^{はなまへ}、花前^{はなまへ}といつてへやへ遊び^{あそ}びにゆく。花前^{はなまへ}は、ついに自分で菓子^{かし}など買^かうてきて、民子^{たみこ}にやるようになった。ときにはさびしい笑^{わら}いようをして、タアちゃんと一言^{こと}くらいよぶのであつた。そう思つて見ると、花前^{はなまへ}の毅然^{きぜん}とした顔つきが、このごろは、いくらかやわらいできたようにも見える。若^{わか}衆^{しゆう}の話では、花前は近^{ちか}ごろ元氣^{げんき}がおとろえたようだという。それでもその水車^{すいしや}的運動^{てきうんどう}にはまだすこしも變^かわるところはなかつた。

それからひと月ばかり花前^{はなまへ}の新傾向^{しんけいこう}はさしたる発^{はつ}展^{てん}もなく秋もようやく涼^{すず}しくなつ

た。

七

花前の友人という人が、とつぜんたずねてきて、花前の身分がようやく明らかになった。友人というのは、某会社の理事安藤某という名刺をだして、年ごろ四十五、六、洋服の風采堂どうとしたる紳士であつた。主人は懇切に奥に招じて、花前の一身につき、問いもし語りもした。

安藤は話の口があくと、まず自分が一年まえに会つたときと、きよう会つた花前はほとんど變つてゐる。自分は十代から花前と懇意であつて、花前にはひとかたならず世話もなつたが、自分も花前のためにはさうとう以上につくした。いまのような境遇になつて、だれひとりおとのうてなぐさめるものもないうちに、自分だけはたえず見舞うておつた。

その自分に対して、去年会うたときには、某牛舎に寝ておつて、うん安藤かといつたきり、おきもしなかつた。それがきようは、意外に自分を見るとうれしそうに立ち

あがつて、よくきてくれたといった。じつは自分は花前はもうだめとあきらめていたところ、きょうのようすでは精神の状態が、たしかにすこしよくなつてゐる。この家へきたときからこのくらいか、あるいはいつごろから調子がよくなつたかと問うのであつた。安藤は眞の花前の友である。

主人は花前が近來の変化のありのままを語つたのち、今後あるいは意外の回復をみるかもしれないと注意した。安藤はもちろん見込みがありさえすれば、すぐにも自分が引き取つて治療をこころみんと決心を語り、つづいて花前の不幸なりし十年まえの経歴を語つた。

花前は麻布某所に中等の牛乳屋をしておつた。畜産熱心家で見職も高く、同業間にも推重されておつた。母がひとり子ども三人、夫婦をあわせて六人の家族、妻君といふのは、同業者のむすめで花前の恋女房であつた。地所などもすこしは所有しておつて、六人の家族は豊かにたのしく生活しておつた。

それ以前から、安藤は某学校の学費まで補助してもらい、無二の親友として交際しておつたのだが、安藤がいまの会社へはいつて二年めの春、母なる人がなくなり、つづいて花前の家にはたえまなき不幸をかさねた。

その秋の赤痢流 行のさい、親子五人ひとりものこらず赤痢をやった。とうとう妻と子ども三人とはひと月ばかりのあいだに死亡し、花前は病院にあつてそれを知らないくらいであつた。

そんな 状 況 であるから、 営 業 どころの騒ぎでない。自分が 熱心奔走してよ
うやく 営 業 は人にゆずりわたした。花前は二か月あまりも病院におつていつまで話さ
ずにおくわけにゆかないから、すべてのことを話すと、

「破壊しおわつた断片の一個をのこしてどうするものか、のこつたおれだつてこまる、
のこされた社会もこまるだろう、この一個の断片をどうかにかけてくれ、おれはどうして
もこの病院をでない」と 絶 叫 して泣いたけれど 命 数 があれば死にも死なれないで、
花前は追われるように病院をでた。病院をでてもうまく家はな。待つてる人もない。安藤
が自分の家へつれて帰つたものの、慰藉のあたえようもない。花前はときどき相手かまわ
ず、

「どうせばえいんだ」
とどなる。

安藤は手のつけようがないから、ともかくも湯河原へつれだした。そうして自分もい

つしよにひと月もおつてなぐさめた。どうかして宗教にはいらしめようとこころみた
 が、多少理屈の頭があつたから、どうしても信仰にはいることができない。破壊以前
 が人なみよりもあたたかい歡樂に富んでおつただけ、破壊後の悲惨が深刻であつた。
 自分もそうそういつしよにはおられないので帰京すると、花前はそのまゝ一年半も
 その家におつた。あつただけの財をことごとく消費して、ただ帰京の汽車賃で安藤の
 家に帰つてきた。そのときにはたしかに精神に異状を呈しておつた。なにを話してみ
 ようもなく、花前は口をきかなかつた。

その後無断で安藤の家をでて、以前交際した家に乳しぼりをしておつた。ようやく見
 つけてたずねていくと、いつのまにかいなくなる。また見つけだしてたずねると、またい
 なくなる。ゆくさきざきの乳屋で虐待されて、ますます本物になつたらしい。じつ
 にきのどくというて、このくらい悲惨なことはすくなかろうと、安藤は長ながと話しおわ
 つて嘆息した。

主人もことばのかぎりをつくして同情した。しんせつな安藤はともかくも治療の
 見込みがすこしでもあるならば、一日も見てはいられぬといって辞し去つた。

安藤は去つてから三日めに、車を用意して自身むかえにきた。花前は安藤のいうことをこぼまなかつた。いよいよ家をでるときには主人にも、ややひととおりのあいさつをして、厚意を謝した。台所へでて、無言に夕アちゃんをだいたときには、家のものみなが目をうるおした。花前が去つたあと、あのはしの話を聞きたかつたけれど、なんだかきのどくで聞かれなかつたと下女も涙をふいた。

十日ほどたつて、主人は花前を青山の脳病院におとのうてみた。花前は非常によろこんだ。話しするところによると精神のほうはますますよいようであるが、それと反比例にからだのほうはたいへん疲れてるように見えた。それから二十日ばかりして、花前は死んだと安藤から知らせてきた。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」ジュニア版日本文学名作選、偕成社

1964（昭和39）年10月1刷

1984（昭和59）年10月4刷

初出：「ホト、ギス 第十三卷第一號」

1909（明治42）年10月1日

※表題は底本では、「箸《はし》」となっています。

※「兼吉」に対するルビの「かねきち」と「けんきち」の混在は、底本通りです。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2016年9月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

箸

伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>